

開催報告

秋学期FD講演会

「学びとは何か—高等教育機関において〈探究人〉になるために—」

【2019年12月10日】

高等教育機関において〈探究人〉を育てるための「よい学び」とは何か。この問いに向き合い、教育改善の手がかりを探ることを目的として、池袋キャンパスにてFD講演会を開催しました。今井むつみ氏（慶應義塾大学・教授）を講師にお迎えし、「よい学び」を考えるためのヒントとして認知科学の視点から「生きた知識」を創造する学びについてお話しいただきました。学内外から35名が参加しました。



今井むつみ氏

講演ではまず、知識についての誤解（ドネルケバブモデル）の話から始まりました。ドネルケバブという料理が肉片を集成して作られるように、知識を客観的事実と捉えて、知識片を貼り付けて大きくすることで知識は習得されるという認識は誤解であるという指摘でした。しかし、X線写真を例に、熟達者の見え方が素人や初心者の見え方と

全然違うように、知識の習得とは見え方を変えるものであり、本来は人の心の中で構成されるものであるとお話してくださいました。そして、「生きた知識」とは熟達によってすぐに行動に結びつく知識になっていること、つまり身体化され、推論にすぐに使える知識を指すのだと述べられました。

また、日常で目にするようなコインの投げ上げを例に挙げ、物理学の授業で力学について学んだ大学生でも「コインにはたらく力は？」という三択問題で直感的に回答をして間違えてしまうように、人は思い込みで生きており、同時に思い込みの仮説（自分なりの推論）を創ることにより知識の体系を創ることができるとお話しいただきました。「生

きた知識」を獲得するには思い込みが鍵であり、重要なのは正しい答えを教えてもらうことではなく、自分の認識が誤りであることをいかに発見し認めるかにあることを強調されました。

最後に、具体的な学習方法にも言及しながら、思い込みを克服してよい学び手（探究人）になるためには、自分が何をわかっていて、何がわかっていないかに注意を向けることや、推論の過程を充実させる手立てを工夫できることが大切であると締めくくられました。

質疑応答では参加者が日頃から感じている教育活動における葛藤が次々と語られ、盛会のうちに終えることとなりました。参加者アンケートでは、「知識は単に脳に蓄積されるという発想は捨てようと考えを改めた」という感想や、「学びの過程で起こっていること、障害になり得ることを心得て講義を構成しなければならないこと」が印象に残ったなどの声を頂いています。

ご登壇、ご参加いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。

助教 山路 茜



講演会の様子

次ページ「英語で専門科目を教える」インタビュー

刊行物のご案内

大学教育開発研究シリーズNo.28

学びとは何か—高等教育機関において〈探究人〉になるために—

上で報告したFD講演会の記録冊子を2020年3月上旬に発刊しました。講演会の詳細を資料とともに掲載しています。全専任教員に配布するほかHPにも掲載しますので、ぜひ一読ください。

■ 講演部分の動画はこちらからご覧いただけます。

<https://spirit.rikkyo.ac.jp/cdshe/SitePages/index.aspx> (SPIRIT▶当センターHP▶「取り組み・刊行物」)



Rikkyo Education

Rikkyo Educationは、立教大学で行われている授業実践や教育上の取り組みを紹介するコーナーです。本学では2024年度までに各学部でEMI科目(英語で教授する専門科目)を展開することを目指しています。そこで今号は英語による専門科目「演習B7・B8」を担当している文学部のYATES, Michael D. H.(イエイツ マイケルD.H.)准教授に、その実践経験をお話いただきました。

英語で専門科目を教える

文学部文学科英米文学専修 准教授 YATES, Michael D. H.



イエイツ マイケルD.H. 准教授

略歴

米国にてエバグリーン州立大学を卒業、カリフォルニア州立大学に進み、修士課程を修了。英国に渡り、エディンバラ大学の博士課程に在籍しながらチューターも務める。博士号を取得後、日本で神戸大学准教授、関西学院大学教育講師を務め、2016年に本学に着任。

「演習B7」(春2単位)・「演習B8」(秋2単位)の概要

履修者数 : 20人前後

対象年次 : 3・4年生

授業の目標:

The objectives of this course are: (1) to describe the methods and means of critically interpreting the cultural/literary/narrative content of the "Western" film, (2) to consider the medium of cinema as a form of literary text, and (3) to guide the student through the basics of writing a coherent critical analysis. (2019年度シラバスより)

※英語で行われたインタビューを日本語で編集しています

米英日での教育経験

— Yates先生が学生として、あるいは教員として経験されたアメリカやイギリスの大学教育と日本の大学教育では、どのような違いがあるのでしょうか？

Yates: 難しい質問ですが、学費とプレッシャーが違います。イギリスでは学費が年々上がっていますし、アメリカは世界で最も学費が高いのではないのでしょうか。日本は比較的安いと思います。また、日本では高校卒業後すぐ大学に入らなければなりません、アメリカでは数年考えて決心した後に入学することもできますから、高等教育へのモチベーションは違うでしょう。あえて入学したのに遊んで過ごしたり、得るものがなかったりしたら、高額な学費が無駄になるからです。

指導方法もかなり違うと思います。アメリカでは大規模授業が多く、教員がいつも教室にいるとは限りません。ハーバードやスタンフォードのような有名大学では院生が教員の代わりを務めることもよくあります。イギリスはもっと教員と学生のつながりが強いと感じます。教員と学生の隔たりがなく、同じ学問の道を志す共同体のような感じです。全寮制の大学であれば教員も学生も同じ敷地内に住みますから、教員は学生の友達が誰か、ペットは何か、家族のように知っています。日本は教員と学生の間に少し隔りがあるように感じます。学生は学生、教員は教員として“かしてまる”というか、私的な会話をすることがやや少ない気がします。良い面でも悪い面でもありますが、教育環境としてはそれが異なる点でしょう。日本では学生が先生

に反論することは少ないように思いますが、イギリスやアメリカでは、学生は議論をふっかけてくるものと思っていますし、それを期待しています。常に闘いですから大変です。

— エディンバラと神戸大、そして立教での指導経験から、イギリスと日本の学生に何か違いを感じますか？

Yates: 知識のレベルはほとんど変わらないと思います。そのため、指導の仕方は変えていませんし、演習もほぼ同じ形態です。しかし、日本とスコットランドの学生を比較すると、日本は聞くことに、スコットランドでは話すことに関心がより高いです。スコットランドでは演習の間に話している学生を制して他の学生が話せるようにしなくてはならず、学生を抑える感じです。日本の大学(神戸大・立教大)では、学生が話すように仕向けたり、うまく意見を生み出して考えを言葉にできるよう導いたりするのが教員の役目です。

英語で専門科目を教える上での心がけ

— 本学の「演習B7・B8」履修学生の英語能力や興味・関心についてはどのように思われますか？

Yates: とてもやる気のある学生たちです。私の授業は課題が多くハードだと聞いているはずなので、履修する学生には勇気があります。真面目にやらない学生もいませんし、準備も授業中もしっかりテ

キストに向き合って課題もこなし、とてもよくやっています。

英語能力は基礎的なレベルからかなり上級レベルまで幅広いです。しかし学生たちのモチベーションが高いので、学生たちが自らのアイデアを集約する、ノートに取る、それを言葉で表現するという取り組みを通じて学生たちの自信を高め、考える時間を増やすことにつながようとしています。

—— 英語能力が基礎レベルにある学生に対して、どのような課題を感じ、工夫をなさっていますか？

Yates: 時々、考える時間が十分ないと答えられない学生がいます。その場で学生に質問を投げかけて、ひたすら答えるまで時間が過ぎるのを待つだけだと時間ももったいないです。また人前で答えられない経験をさせると、学生は恥ずかしいと感じがちで、自信を失った学生が次の授業に来なくなることは避けたいです。だから、考える時間がとれない時は“curved question”は出さないようにしています。

—— “curved question”とはどのようなものですか？

Yates: カーブボールのように学生が予期していない、そして答えることが難しい質問です。一見その時の話題に関連しているように見えず、一筋縄ではいかないものです。このような質問を学生たちに投げかける時は、3人グループかペアで話す時間をとります。最近は頻繁にグループワークにしますが、机が固定している教室だと難しいですね。

例を挙げると、『赤ずきんちゃん』のテキストを読んでいる時であれば、「もしあなたがオオカミだったらどうする？どう感じる？」といった質問です。こうしたアイデンティティの変更はかなり挑戦がいのあることです。人間ではない、オオカミというアイデンティティを身にまとい、そのうえで考えるという行為は容易ではないからです。その場で質問するだけでなく、ライティングの訓練として問いかけた方がよいかもしれません。ですので、私はハンドアウト（配布資料）を学生に配布しています。

—— ハンドアウトは毎授業、準備しているのですか？

Yates: 毎回です。課題のテキストについて、読む時のガイドとなる質問などを用意しています。学部生には授業の1週前に渡していて、授業の時にそれらの質問について議論するようにしています。院生の演習では当日その場で渡しています。



—— 学部生に専門科目を教える際は、学生が専門的テーマを教員が十分と思うほど考えられないといった難しさがあると思います。英語母語でない学生に英語で専門科目を教えることについてどう思われますか？

Yates: テーマによって難しいのはその通りだと思いますが、日本に限った話ではありません。外国語だという点で確かに挑戦ですが、学部生に知識や読む力が足りないのはどの国でも同じです。例えば、私は次年度アイロニー研究をM1とD1の院生向けに取り上げるつもりですが、かなり挑戦的です。アイロニー研究では、文字通り読むのではなく行間を読むこと、あるいは逆の意味で捉えることが重要です。例えば、一見すると情熱的な愛情を描いた小説を扱うとき、そこにロマンティックな側面を読み取ることは、最初のレベルの理解となるでしょう。ところがアイロニックな読み方ではそれを疑います。「これは本当にロマンティックなのか？」「そこに風刺性は潜んでいないのか」と、浮かんだ疑問に思いを巡らせます。このような二次的な思考、全てを考え直すことが院生レベルには必要だと思っています。ただ、知識や読み込んだ経験が比較的少ない学部生にはかなり難しいですね。

—— 知識や読む力が足りない学生への指導に際して心がけていることはありますか？

Yates: テキストを多面的に読むことが、批評的な読解法を教える上で大事な最初の一步だと思います。文字通りに一元的な読み方をする場合でも、批評的に読もうとすることはできます。でも、それは第一歩にすぎません。そこから、同じテキストを複数の側面、例えばセクシュアリティ、ジェンダー、階級といった多様な観点から読むことを促します。その際、心がけるのは学生にたくさん質問することです。理解度を確認するためだけでなく、疑問を持って発する習慣を作るためです。問いを持つことが文学へのアプローチの要だと私はアメリカとイギリスで学んできました。

英語授業を担当する教員へメッセージ

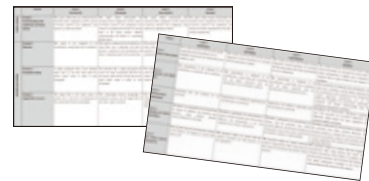
—— 最後に、これから英語で専門科目を担当することになる教員へアドバイスを頂けませんか？

Yates: 一番の問題は、教える側が話す力を十分に持っていないと思込むことです。ネイティブだから上手な英語を話すに違いないと期待値が上がるように、教員に対する言語レベルの期待は通常高くなりがちです。しかし、たとえ文法が完璧でなくても語彙が足りないとしても、胸を張るべきです。ネイティブスピーカーでも文法や言葉のチョイスを間違えることは多々あります。リスクをとる姿勢は学生に必ず届きますから、ベストを尽くし、ミスを気にしないことです。私からのアドバイスは「失敗を恐れず自信を持って」ということです。Don't be afraid of mistakes and be confident!

インタビューー：センター員・文学部准教授 高林 陽展
インタビューまとめ：助教 山路 茜

ルーブリック“英語版”をリリースしました!

当センターでは、主に初年次指導向けとして「論証型レポート・ルーブリック」と「プレゼンテーション・ルーブリック」を2015年に開発し、専任教職員・兼任講師の皆様が本学の授業において使用される場合に提供しています。このたび、利用者からの声にお応えし、英語版をリリースしました。ぜひご利用ください。



申込先(大学教育開発・支援センター)

cdshe@rikkyo.ac.jp

以下の点を明記してメールにてご連絡ください。

1) ルーブリックの種類(「論証型レポート」/「プレゼンテーション」) 2) 言語(日本語版/英語版) 3) 使用する授業科目名、履修対象者(学部・年次)

第1回 英語FD研修会開催

「英語で授業をやってみよう!」

[2019年10月16日]

教員が英語で教えるために必要な英語表現、スキル、手法を学ぶ研修会を池袋キャンパスにて開催しました。本学では総合発展基本構想において「英語による専門教育展開の支援と推進」が計画されています。当センターにおいては、各学部の英語による専門教育科目開発の推進に向けて、これから英語での講義を担当する教員を対象に授業支援と授業展開の一助となるよう本プログラムを実施いたしました。

第1回となる今回は「講義とプレゼンテーション(導入)」コースでした。講師にはブリティッシュ・カウンシルからアニー・ヒューバート先生をお招きし、所属学部等の異なる13名の本学教員が朝10時から夕方17時まで一日かけて英語で授業をする際のノウハウを学びました。



コース内容に沿って、授業の構成やビジュアル資料の効果的な利用方法、ボディランゲージを交えた実践的なプレゼンテーション手法等について学んでいきました。専門分野の異なる教員同士ということもあり、序盤は参加者に不安を感じる様子が見受けられましたが、アニー先生のファシリテートの効果もあり、ロールプレイを行う場面では和気あいあいとした雰囲気次第に笑顔が垣間見られるようになりました。

今後も当センターでは英語による授業実践に関するFDを企画する予定です。



大学教育開発・支援センター 事務局

参加者からのメッセージ

- 予想を超えてプラクティスが多く、楽しく頭と体を使って勉強できました。
- 参加者の英語のレベル、専門分野(例:文系と理系)、使う専門用語などを切り分けて実施すると効果が上がるのではないかと。
- 今回学んだことは、英語の授業だけでなく、日本語の授業でも役立ちそうです。
- 実践的に学ぶことが多く、とても役に立った。ハンドアウトもとてもよく、多くの情報を得ることができた。

